

目次

- ・ワインと機械工作室……佐藤祐司 (pp.1-8)
- ・series わたしの仕事 (2)三菱日立パワーシステムズ……高橋忠将 (pp.9-12)
- ・ウエスティングハウス社とアメリカ合衆国の思い出(10)……中谷 博 (pp.13-18)



©京都を歩くアルバム <http://kyoto-albumwalking2.cocolog-nifty.com/>

ワインと機械工作室

佐藤祐司 (機械工作室)



1. はじめに

2002年に文部技官として機械工場へ赴任し、現在は機械系研究室のサポートおよび機械製作実習の指導を主な業務としながら、機械工作室の技術職員として日々教員の方々や学生さん達と教育研究の支えとなるよう業務に励んでいます。

この度、自身は京機会メンバーではありませんが編集責任者であります吉田先生から執筆をご依頼されました。今回は、趣味の一つでもありますワインのお話と最近の機械工作室事情について御紹介致します。

2. 物理系新年親睦会について

まず、新年1月7日に行われました桂キャンパスで初めての物理系新年親睦会（於：CクラスターⅢ棟カフェテリア）を紹介します（[図1](#)）。

今回の目玉として「利きワイン」コンテスト（[図2](#)、[表1](#)：次ページ）があり赤ワイン5種類（ワンコインワインから超高級ワインまで）を当てるという企画があり、そのワイン選定を私がワインについて精通しているということで「飲みものがかり」の富田先生から拝命しました。結果として見事2名の方が全問正解され（[図3](#)）賞品として豪華京大メダルチョコレートが贈呈されました。久しぶり全体での新年会ということもあり、終始ワイワイガヤガヤ皆さん楽しまれました。



[図1](#) 新年会の集合写真

[図2](#) 利きワイン一覧

[図3](#) 正解者の喜び

3. 私とワイン

ワイン選定を任されるだけあって言わずもがな酒好きな自身なのですが、なぜワインにはまっていったのか？

発端は、昔とある料理屋でグラスワインを呑んだときからでした。それまでは、酒だったらなんでもよいで、ビールから焼酎からリキュール類までなんでも呑んでいましてワインなんかはワンコインワインしか呑んでおらずただの呑兵衛でした。たまにはマシなワインでも呑もうと冒頭の特にお高級でもないグラスワインを呑むと、これまでとは呑んだことのない味わいに感動しそれが始まりです。ただ、どんな銘柄かどんな品種かを覚えておらず、その時のワインを見つけるべく



	B	A	D	E	C
ボトル	1	2	3	4	5
					
生産者	インドミタ	デツアーニ	ドメース・デュ・グラン・クレス	シャトー・ラグランジュ	ジャック・フレデリック・ミュニエ
銘柄	INDOMITA Cabernet Sauvignon	MONFERRATO ROSSO MASERETO	Domaine du Grand Cres Corbieres Crescendo	Les Fiefs de Lagrange	Jacques Frederic Mugnier Nuits Saint Georges 1er Clos de la Marechale
産地	チリ/セントラルヴァレー	イタリア/ピエモンテ	フランス、ラングドック地方	フランス、ポルドー地方、サン・ジュリアン村	フランス、ブルゴーニュ地方、ニュイ・サン・ジョルジュ村
ヴィンテージ	2018!?	2015	2014	2012	2006
品種	カベルネ・ソーヴィニオン	ドルチェット、バルベラ、カベルネ・ソーヴィニオン	シラー70%、グルナッシュ30%	カベルネ・ソーヴィニオン61%、メルロー31%、プティ・ヴェルド8%	ピノ・ノワール100%
タイプ			赤・ミディアムフルボディ	赤・フルボディ	赤・ミディアムフルボディ
格付		DOC モンフェラート・ロッシ	AOCコルビエール	サン・ジュリアン3級(セカンド)	AOCニュイ・サン・ジョルジュ
味わい	重めの果実香。強めの渋味で、強めのアルコール臭でフレッシュさが前にでています。口に含むと渋味と酸味を強く感じ、後味にピリリとした強めのタンニンがアクセントになっています。	DOC モンフェラート地区で育ったピエモンテ・モンフェラート地区で育ったドルチェット、バルベラ、カベルネをブレンド。全て手摘みで収穫し発酵後、オーク樽で数ヶ月間熟成後、瓶でも熟成させています。野生ベリーや赤い花の華やかな香り、酸味とコクをバランスよく併せ持ち、口当たりはとてよわわらか。程よい樽のニュアンスが食欲かきたててくれます。	南仏とは思えないほどのエレガンスを体現する1本。アタックはまるでブルゴーニュのピノ・ノワールを思わせるほどで、フレッシュなカシスやブラックベリーの香りが広がります。	2012年は乾燥した時期と激しい雨に見舞われた時期のある複雑な天候となりました。特にカベルネ・ソーヴィニオンが美しい味わいとなり、カシス、リコリス、モカなどの香りが感じられ、フルーティーな風味を持つ味わいに仕上がっています。フレッシュさがありながらも、丸みを帯びた口当たりで、あと10年程度の熟成に耐える高いポテンシャルを秘めています。	繊細な芳香、官能的な独特の香り、どこまでも優雅な、たおやかさが特徴のミュニエですが、ニュイ・サン・ジョルジュも秀逸です。なめらかな口当たりの中に、エレガントさがそこはかとなく感じられます。
価格	¥398	¥980	¥2,520	¥3,960	¥24,600

表1 ワインリスト

それからひたすら呑みまくりやっとなし当てたのが、ボルドー・サンテミリオンのメルローでした。それを契機にワインの奥深さを知りただ呑むだけではもったいない、もっと理解したいとの一心で、試飲会やワインフェス、ワイン教室に行きまくり、ワイン検定シルバークラスを認定されるだけでは飽き足らずソムリエの一般愛好家向けのワインエキスパート試験を受験するまでになってしまいました（二次試験でダメでしたが・・・）。そんなワインバカな私ですが、昨年念願のワイン周遊と称しフランスへ行って参りましたので次章で報告致します。

4. フランスワイン銘醸地へ

昨年6月に1週間の日程で、シャンパーニュ地方、ブルゴーニュ地方、アルザス地方へ巡りワイン用ブドウ畑と醸造についてほぼ研修旅行のような感じで行ってまいりました。

初日はCDG空港からシャンパーニュへ行く予定だったのですが、フランス国内でもこれまでにない大規模なSNCFのストで空港内に数時間も足止め。ホテルに着いたのは現地夜中過ぎで日本からの移動時間が約26時間、先行きが思いやられる一日目でした。そのトラブルも初日だけで2日目以降は大きなトラブルもなく気持ち悪いくらい順調でした。

2日目と3日目はシャンパーニュ地方のエペルネとランスのワイナリーを巡りました。シャンパーニュというと、ネゴシアンであるモエやボランジェなどの大手メゾンが目立っていますが、実際はレコルタンという家族経営の小規模なメゾンがほとんどです。2日目のエペルネでは午前中に家族経営で小規模なメゾン、午後は中規模メゾンの訪問でした。

宿泊しているランスからエペルネまでTERで行きエペルネ駅からそのメゾンまでタクシーで行ったのですが、町の中心部から離れると行けども行けどもブドウ畑（[図4](#)）。そんな風景見たこともなく大感激です。メゾンでは醸造設備や出荷設備などを見学させて頂きました



（[図5](#)、[6](#)）。

[図4](#) エペルネのブドウ畑



図5 ピュピトル



図6 デコルジュマン設備

4日目と5日目はブルゴーニュでのワイナリー訪問です。フランスワインはボルドーとブルゴーニュが有名ですが、ボルドーは中世イギリスの支配下だったという歴史もあり貴族が経営するシャトーでかなり資金豊富なワイナリーが多いですが、ブルゴーニュはそれとは対照的に小規模なワイン農家が大多数です。そのブルゴーニュでは、ヌイサンジョルジュとムルソーとヴォーヌのワイナリーを訪問しました。ここでも行けども行けどもブドウ畑でしたが、シャンパーニュよりも広大な畑の広さで世界的にもワインの銘醸地だけあります（図7）。畑ではちょうど結実の時期でもあり小さな実が確認出来ました（図8）。2日間を通して3つのワイナリーを巡り、輸入業者もまだ試飲してない銘柄など多くの試飲をさせて頂き（図9）、樽熟成をしている地下も見学させて頂き樽から直接試飲（図10）させてもらえるという大変貴重な体験までさせて頂きました。



図7 ブルゴーニュのブドウ畑



図8 ブドウの樹（結実状態）



図9 試飲ボトル



図10 樽からの試飲

6日目はアルザス地方へ移動してのワイナリー訪問です。地理的にも歴史的にもドイツと深い関係があるだけに町並み（図11）はドイツ風でビール（図12）も豊富です。



図11 コルマルの町並み



図12 アルザスビール

最終日は、ワイナリー巡りから離れてパリ散策へ（図13）。時間の都合でセーヌ川クルーズくらいしか観光は出来ませんでした。ワイン漬けの6日間だったのでいい気分転換になりました。

こうしてフランス周遊は終わったわけですが、全日程を通して感じたことは、“パリ以外”の地方の方々はずごくフレンドリーなんだなと痛感しました。訳の分からない日本人がいきなり訪問したにもかかわらず、最寄りの駅まで送ってくれたり、タク



図13 オペラ座全景

シーを呼んでくれたり、レストランを確保してくれたり、心温かく対応して頂いて心から感謝感謝の6日間でした。『フランス＝パリ』みたいな風潮がありますが、是非ワイン抜きでもパリ以外のフランス各地方へ訪問して頂けたらと思います。

ワインについてはまだまだ書き足りませんが、これくらいに。また機会があればウンチク等々語りたと思います。

5. 機械工作室について

本業についても報告致します。現在の業務は冒頭でも申しました機械工作室(図14、15)、いわゆる機械系工場で各研究室からの実験装置の製作や機械製作実習の指導を行っております。

工場から機械工作室へと名称が変わったのは、法人化を前にして今一度工場を見直そうとして2004年に「機械工場と技官のありかた検討委員会」を教官の方々と立ち上げ、運営方法などを見直し活動内容を改めより良い研究室の対応と教育をサポートしていくために名称も含めて一新した次第です。

例えば、それまで慣れ合い的に加工依頼を行っていた事を、依頼書を記入して頂きそれらをエクセル等で管理しデータとして保存し、再度の依頼や加工修正などでも容易に対応可能にしました。また、学生が直接加工する際には学生証がICチップ化されていることからカードリーダーにより、機械単位・作業員単位・研究室単位でデータを蓄積出来るようにしています。

とはいえ、加工機械自体は昔からはさほど変わっておらず2002年にマシニング、2007年にワイヤー放電加工機が導入されたくらいで、汎用旋盤、汎用フライス等、昔から使用している機械もまだまだ現役で頑張っています。



図14 機械工作室の場所(緑部地下1階)



図15 機械工作室全景

機械製作実習（[図16](#)）は半世紀続いたバイスの製作から2003年にスターリングエンジンの製作へとテーマが変わりました。実習時期も2012年に桂へ移転してから夏休みの3週間集中して行うことになり、学部生達は吉田からわざわざ通わなくてはならなくなりましたが、最終日の組立の際は実際に動作させ回転数計測を行い、さながらコンテスト風になるため達成感はかなり向上しています。



図 16 スターリングエンジン組立風景

現在の要員は30代2名、40代1名、それから50代の筆者4名で若返りが進み活気よく日々業務に勤しんでいます。桂キャンパスにお越しの際は当機械工作室を是非見学して頂けたらと思います。



波多野直也 : hatano.naoya.4x@kyoto-u.ac.jp

佐藤佑樹 : sato.yuki.3n@kyoto-u.ac.jp

玉木良尚 : tamaki.yoshitaka.3a@kyoto-u.ac.jp

佐藤祐司 : satoh.yuuji.7r@kyoto-u.ac.jp

<https://www.me.t.kyoto-u.ac.jp/ja/information/workshop>

series わたしの仕事 (2)三菱日立パワーシステムズ

高橋忠将

(H23/2011卒)



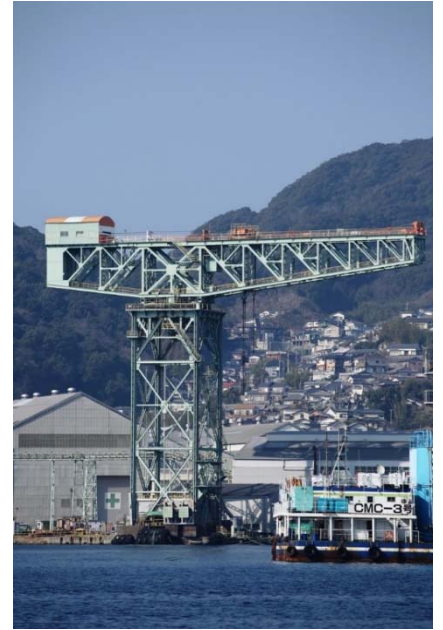
series「わたしの仕事」第二弾です。前回の京機短信から始まった本企画。研究室の先輩にあたる安富さんの記事を拝読し、「吉田先生に頼まれたら断れないよなあ」などと人ごとに思っていたところ、その翌日、当の吉田先生から寄稿依頼のお声掛けを頂き、当然断れるわけもなく、今回筆を取る運びとなりました。社会人6年目でまだ多くを語ることはできませんが、学生の皆さんが企業を選ぶ際の参考程度になれば良いなと思い、私の仕事を紹介させていただきます。

改めて簡単に自己紹介しますと、私は2011年に物理工学科を卒業、2013年に航空宇宙工学専攻を修了し、現在は三菱日立パワーシステムズ株式会社の長崎工場に勤めております。在学中は吉田先生率いる熱工学研究室で固体酸化物形燃料電池 (Solid Oxide Fuel Cell、SOFC) の研究に取り組んでいました。就職活動の際、SOFCの応用先としての火力発電に興味を持ったことから、SOFCを含めたコンバインドサイクル発電開発に取り組んでいた当時の三菱重工業株式会社に入社したというのが経緯です。その後、三菱重工と日立製作所の火力発電部門が統合して出来た三菱日立パワーシステムズに籍を移し、現在に至ります。



KART (<http://www.formula-kart.org/>) に打ち込んだ学生時代 2010年9月 (後列中央右が筆者)

三菱日立パワーシステムズの中で私は、蒸気タービンを始めとした大型回転部品の製造部に所属しています。このタービン製造部門は、160年を超える歴史がある三菱重工長崎造船所（三菱日立パワーシステムズで言うところの長崎工場）の中でも特に伝統のある場所に位置しており、工場の脇に三菱重工の創業柱があったり、世界遺産に登録されたジャイアントカンチレバークレーンも部の所管品であったりと、やたらと歴史を感じる部署です（ちなみにこのクレーンは現役で稼働しています）。また京機会員で言うと、藤川さん



世界遺産ジャイアント
カンチレバークレーン

（S42）、相馬さん（S50）が歴代部長に名を連ねていらっしゃいます。扱う製品は、発電事業用／産業用の蒸気タービン、船舶用主機タービン（＝推進用タービン）及び歯車装置、ボイラ用ファン等の回転機械で、これらの機械加工から組立までを行う、いわゆる「現場」部門です。私たち大卒社員の仕事は多岐に渡り、図面検討、工法検討／指示、治工具設計、工程管理、品質確認等の日常業務から、設備導入や新工法の研究開発といった改善業務までを行っています。基本的に私たちが扱う製品は一品一様なので、前回と同様に造れば良いといったことがほとんど通用せず、日々変化に対応しながら、その時の最適な条件で現場を運営していくことが重要になります。実際に現場に出て自分であれやこれやと手を動かすこともあり、泥臭いところも少なからずありますが、目の前で重さ数十トンを超える製品が日に日に完成に近づいていく様を見られる、まさに「ものづくり」を味わうことができるのが製造部門の魅力と感じています。採用活動に参加すると、学生の方々にはどうも「設計」や「開発」といった業務の方が魅力的に映るようだと感じる場面が多々ありますが、現場作業者とコミュニケーションを取りながら製品を作り上げていく「製造」もなかなか悪くないよ、ということをおこの場を借りて学生の皆さんに伝えたいと思います。

上述のタービン製造部門への配属後、最初の4年ほどは工場内で、タービンロータや大型歯車の機械加工に携わりました。この中で特に思い入れが強いのが歯車です。この歯車は船舶用主機タービンの回転数約6,000 rpmを、スクリュープロペラの回転数約70 rpmまで減速するのに用いられるもので、減速比の大きさから、

歯車自体も最大直径5m程度の大きさになります。歯車装置は、その大きさに比して、マイクロレベルの加工精度が要求される精密部品で、私たちが扱う製品のなかでも最も厳密な品質管理が求められる製品のひとつです。歯車加工に従事する中で、適切な歯当たりを得る為に、加工の最終仕上げ段階では私も現場に張り付いて加工プログラムを修正したりしていた為、自分が造った製品という実感と責任感を味わうことができました。また、当時世界最大の可搬式三次元歯車測定器をドイツメーカーと協力して導入したことや、歯車加工場に隣接する棟のクレーン振動が歯車の加工精度に僅かに悪影響を及ぼしていることを突き止めて対策する等したことが思い出深い出来事として記憶に残っています。

その後、同部門内で他の業務もいくつか経験した後、現在は発電所でのアフターサービス工事の計画・管理業務に当たっています。アフターサービス工事というのは、発電所の定期点検等のタイミングで、老朽化した部品を新しいものに換装したり、部品の修正加工を行ったりする工事のことです。世界的な環境意識の高まりの中、火力発電所の新設案件が減少傾向にある昨今ですが、こういった既設発電所のアフターサービス工事は国内外で多数の案件があり、発電所の定期点検が行われる春・秋は毎年大変な忙しさとなります（電力需要が落ち着いている春・秋に定期点検を行うのが発電業界の通例です）。アフターサービス工事は、お客さんの立てた点検スケジュール内に工事を完了させることが原則なので、計画時点で非常に厳しい工事日程となります。加えて、タービンを分解してみても初めて判明する不具合も少なからずあるので、実際の工事はより一層厳しいものとなるのが常ですが、現地・設計・営業といった関係者と協力して工事をやり遂げ、計画通りにタービンをお客さんに引き渡した時の達成感は大変なものです。このアフターサービス工事において、工事要領を検討し、必要な機材を揃え、作業者を発電所に派遣するというのが私の主な業務ですが、大規模な工事の際は、私自身が現地に出張して工事の管理を務めるといったこともあります。昨年も3ヵ月ほどアフターサービス工事の為にクウェートに出張してきましたし、皆さんがこの文章を読んでいる2月現在もクウェート出張中の予定です。クウェートでの工事は、ドーハウエストという発電所にある8台の蒸気タービンを4年掛かりでリハビリ（経年劣化した部品を換装してタービンの性能を回復する）するという大規模なものです。この工事は発電所内だけでの作業では対応できないので、クウェートにあるローカル工場を使って部品の加工・組立を行っており、私はその工場責任者と

いう立場で出張しています。クウェートにある工場ですが、実際の作業者は出稼ぎのインド人とフィリピン人、部門責任者はエジプト人で工場長はシリア人という国際色豊かな職場です（聞けばクウェート人は国営企業でしか働かないそうです）。外国人は品質や納期に対する考え方が日本人とは異なる為、着任当初は思うように工事が進まず苦労しましたが、それぞれの国の言語（挨拶程度）を交えながら作業者と接するうちに距離感も縮まり、一度人間関係が上手く構築されると不思議と仕事も上手く流れるようになりました。出張の終盤には、休日はインド人の宿舎に行き、インド映画を見ながらインド料理をご馳走になる、なんて程までに人間関係が出来上がり、大変よい思い出になりました（インド人宅では当然地べたに座って素手でご飯を食べます）。また海外現地では、悪条件を乗り越えて業務を遂行することで、エンジニアとしての自信を深めていくことができます。設備や備品が整い、頼れる人が沢山いる日本の工場とは異なり、海外現地では十分な設備が用意されていないことが多く、その環境でできる最良の方法を自分で都度考えて工事をやり遂げる必要があります。また、自分以外に頼れる人がいないといった状況も多々ある為、専門外のことでもどうにか自分で考えて対処することになります。例として、インドに出張に行った際は、私自身で工作機械を修理し、精度調整して使ったこともありました。こういったトラブルに比べると、言葉の壁はあまり問題にならないというのが私の考えです。実際、現場作業者のオジサンたちは数種類の英単語だけを駆使して、どんどん海外出張に行っています。図面さえあれば、異なる言語の



フィリピン人作業者と
クウェートタワー観光



インドでマラソン大会に出場

人々とも仕事ができるというのが「ものづくり」の良さかもしれません。

以上、纏まりのない文章で恐縮ですが、少しでも学生の皆さんが「ものづくりの現場」に興味を持ってくれれば幸いです。

ウエスティングハウス社とアメリカ合衆国の思い出（10）

中谷 博（S34/1959卒）

21. ジャージーシティーからロードアイランド州プロビデンスへ

私の大学の教養部の時からの友人、建築学科の野中泰二郎君（現在京大名誉教授）が、ロードアイランド州のプロビデンスにある、ブラウン大学大学院にフルブライト留学生として、留学していた。手紙で連絡すると、ブラウン大学の卒業式（Commencement）が5月下旬の日曜日に行われるから、来ないかという誘いを受けた。アメリカの大学の卒業式は、滅多に見る機会が無いので、この機会をとらえて自分の車でプロビデンスまで行くことにした。

ジャージーシティーからは、ニューヨークのマンハッタンを通り、コネティカット州の有料道路Connecticut Turnpikeを通過してロードアイランド州プロビデンスに向かった。コネティカット州は、アメリカでも富裕層が多く住んでいて、年間所得が全米で第一位ということである。州のニックネームは「憲法州」（Constitution State）である。途中に、ニューヘブンやニューロンドンなど、イギリス風の名の都市が多い。またコネティカット州は保険会社発祥の地で、Hartford Insurance Companyを初めとする多くの保険会社の本社が集中している。機械工業も盛んで、独立戦争の時には、武器生産の拠点でもあったとのことである。また教育に熱心な州であり、ニューヘブン（New Heaven）は、アイビーリーグの有名なイエール大学（Yale University）の所在地でもあるが、立ち寄っている時間がないので、素通りした。コネティカット州を過ぎて、ロードアイランド州（Rhode Island）に入った。ロードアイランド州は、アメリカで最も小さい州で、ニックネームも「リトル ローディー」と呼ばれている。面積が3140平方kmで、九州の十分の一くらいである。しかし、非常に個性的な州ということである。ロードアイランド州は、ピューリタン牧師のロジャーウィリアムス（Roger Williams）が、ピューリタン以外の宗教を認めない植民地政府と教会に反発して、先住民から土地を譲り受けてプロビデンス植民地を設立したことによって建設された。

プロビデンス（Providence）は、ロードアイランド州最大の都市であり、また州都でもある。（アメリカでは、最大の都市が州都であるケースは少ない）Providenceとは「神の意志」のことであり、ロードアイランド州は、プロビデンスを中心に発展してきた。アメリカで初めて工業化を果たした都市であり、宝石加

工や銀細工の関連産業は、全米トップクラスであるが、今日では学術文化都市の側面が強くなっている。ブラウン大学は、街の高台になっているCollege Hillと呼ばれる地域に広がっている。大学と共に高級住宅が多く、Benefit Streetには歴史的な建造物が多く立ち並んでいる。プロビデンス（Providence）の風景を（写真10.1）に示す。



写真10.1

プロビデンス川の右（東）に広がっているのが、College Hillである。樹木の多い静かな環境で、いかにも大学の街の雰囲気があり、ブラウン大学はアイビーリーグに属するトップクラスの大学である。1764年の創立で、福沢諭吉も学んだことがあり、慶応義塾大学とは、提携関係にある。最初に、野中君の所属している大学の研究所を訪ねた（写真10.2）。久しぶりに再会することが出来た。ブラウン大学に来て、既に一年以上経過していたが、元気そうに見えた。ブラウン大学の正門を（写真10.3）に示す。野中君の案内で、ブラウン大学のキャンパスを見学して構内、キャンパスの写真を撮った（写真10.4）（写真10.5）。アイビーリーグ



写真10.2



写真10.3



写真10.4



写真10.5

の大学の名のとおり、アイビーに覆われた建物や芝生が非常に美しい。ブラウン大学の卒業式（Commencement）が始まり、卒業生と共に、多くの家族が集まっていた。私は、8ミリの撮影機で卒業式の様子を撮影した。この時、スライド写真を撮らなかったため、最近の卒業式の写真を参考のために示す（写真10.6）（写真10.7）（写真10.8）。当時、私が撮影した8ミリ動画のDVD版で見ると、1963年頃



写真10.6



写真10.7



写真10.8

は卒業生の大多数が白人男性であったが、最近の映像では、女子学生も多く、アジアやアフリカ、中南米の出身者が多く見られるようで、学生の構成が変わっているようである。ブラウン大学の方針も、宗教や人種に拘らず、広く受け入れているので、世界中から多くの学生が集まっている。ブラウン大学は、主要な総合大学の学長として、黒人女性が初めて就任したということでも有名である。（写真10.9）は、ブラウン大学のキャンパスで、メイングリーン（Main Green）と呼ば



写真10.9



写真10.10

れる地域で、建物も芝生も美しい。カレッジヒル（College Hill）と呼ばれる地域には、高級住宅が多く見られる（写真10.10）。

カレッジヒルのブラウン大学の西側で、南北に延びるBenefit Streetには、「Famous Mile of History」と呼ばれる、美しく保存されたコロニアル風あるいはビクトリア風の邸宅やビルが立ち並んでいる（写真10.11）。Benefit Streetに沿って東側に、The John Brown House Museumがある（写真10.12）。College of Rhode Islandは、1804年に、商人で愛国者、政治家で奴隷制度に強力に反対して、時の政府により処刑されたJohn Brownの兄弟、Nicolas Brownの寄付によって現在のProvidenceに移転し、現在のBrown Universityに名称が変更されたということである。John Brownと家族は、その地域で、そしてアメリカで最も裕福で影響力があった。この通りには、First Baptist Churchがあり（写真10.13）、野中君に案内し



写真10.11



写真10.12

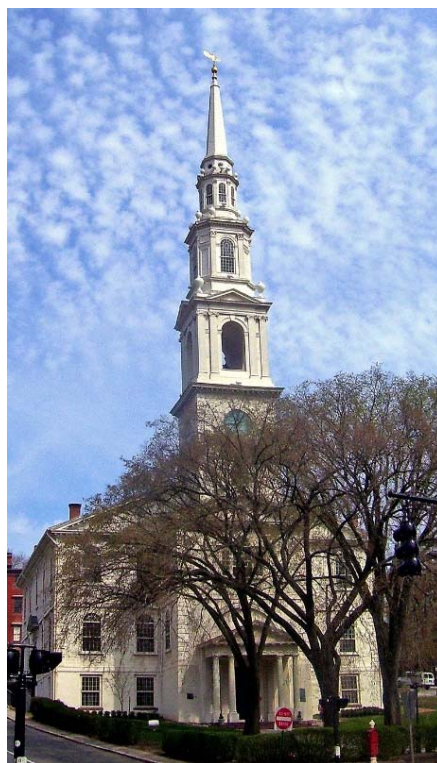


写真10.13

でもらって、内部にも入って見学することが出来た。この教会は、アメリカで初めてのバプティスト教会で、Roger Williamsにより設立されたが、ロードアイランドには、ユダヤ教徒やクウェイカー教徒など宗教的マイナリティーが集まるようになったとのことである。宗教の多様性と自由が、この州の特徴である。

ロードアイランド州の南東部、プロビデンスから約60kmに、ニューポート(Newport)がある。ニューイングランド地方の夏の避暑地として、歴史的なマンシヨンの所在地として有名である。また、ヨットレースでは、世界最大規模アメリカズ カップが沿岸のニューポートを中心に行われ、多くの観光客を引き寄せる。野中君の案内で、野中君のブラウン大学の友人の車で、ニューポートへ出かけた。ニューポート沿岸の風景写真を示す(写真10.14)。ニューポートの港には、大小多くのモーターボートやヨットが停泊していた(写真10.15)。我々3人は、



写真10.14



写真10.15



写真10.16

一番小型のモーターボートを借り受けて、ニューポート沿岸の海でモーターボートを走らせた。野中君と野中君の友人の写真を撮った(写真10.16)。モーターボートから沿岸を眺めると、多くの豪華マンシヨンを遠望することが出来た。これ

らのマンション群は、アメリカ歴史建造物で、ベルウェー通り歴史地区の構成建造物となっている。19世紀以降に建てられた豪邸が、風光明媚な海岸に立ち並んでいる。(写真10.17)は、豪華マンションの一例である。(写真10.18)は、ニューポートの代表的なマンションで、富豪ヴァンダービルト家当主の別邸で、70の部屋と5万3000平方メートルの敷地の東側は大西洋に面し、絶壁になっている。またニューポートには、アメリカ海軍大学校 (United States Naval War College) や、アメリカ海軍の訓練施設が立地しているとのことである。

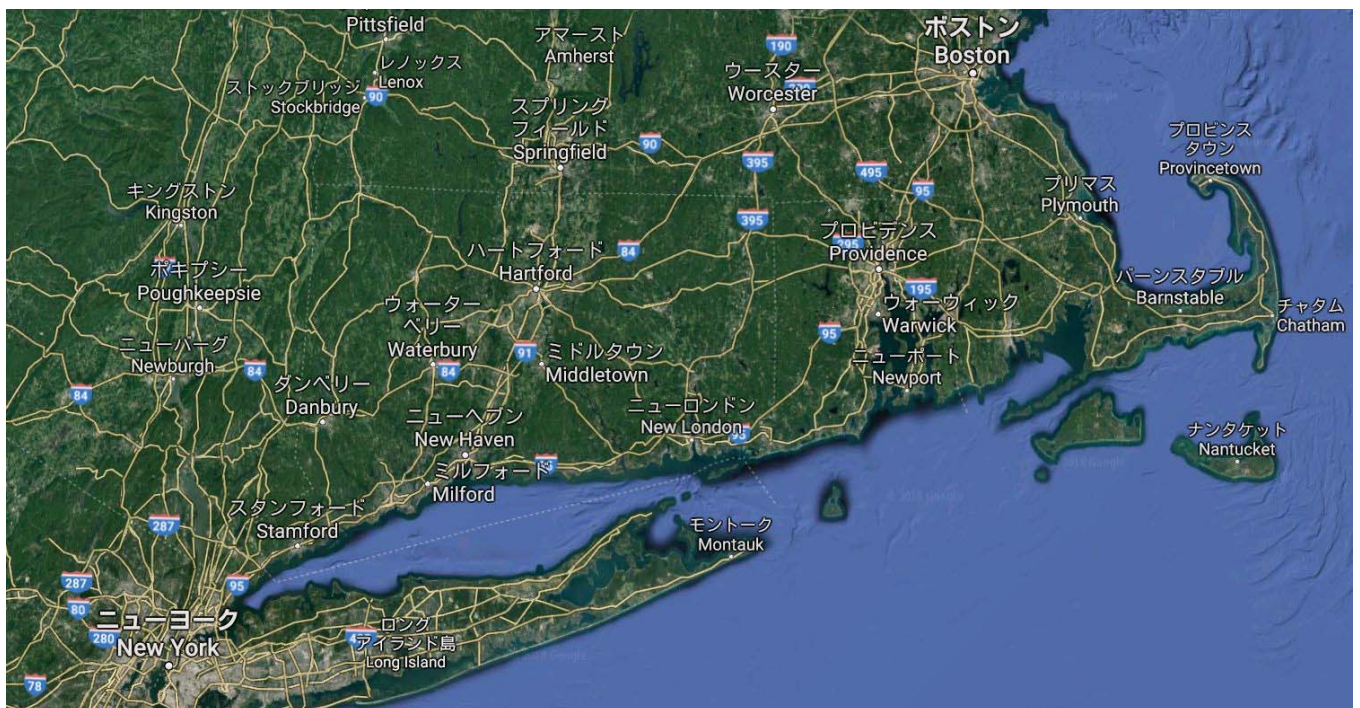


写真10.17



写真10.18

(次号につづく)



NJ、NY、CT、RI、MA周辺地図 (編集者挿入)